地域に開かれた多世代交流の場として子ども食堂を目指して
～子ども食堂に欠かせない中高生の参加～

北澤彩可

論文要旨

これまで子ども食堂に参加する中で気づいたことは、中高生の参加者が極端に少なく、参加者の年齢分布に二極化が起きていることであった。地域の交流の場、みんなの居場所として子ども食堂、その参加者に年齢の偏りがあるのはもったいない。地域に開かれた多世代交流の場として子ども食堂を育み、活用するために、子ども食堂参加者の年齢の二極化を緩和する必要がある。こう考えた筆者は、子ども食堂への中高生の参加を促すことによって、年齢の偏りを緩和し、併せて、中高生の学習支援もすすめてみたい。こうした問題意識から、子ども食堂に中高生を参加させるにはどうしたらよいかを考え、その障害物を取り除く条件を探るのは本稿の目的である。

そのため、本稿では、愛知県内 59 か所の子ども食堂を対象に行ったアンケートから最も中高生の参加者が多い子ども食堂を見つけた。そして、実際にその子ども食堂である、子ども食堂おむすびや学習支援 Link up に参加し、なぜこの子ども食堂には中高生の参加者が多いのか知るためにアンケートを行った。そのうえ、3 年間、学習支援にアルバイトとして関わってきた経験と様々な子ども食堂に参加してきた経験から、いくつかの知見を見出すことができた。

子ども食堂に中高生の参加を促すには、第 1 に、学習支援と食事が効果的であること、第 2 に、イベントは中高生にとって子ども食堂に参加する大きなきっかけや理由にはならないが、子ども達が能動的に参加できるイベントは中高生に人気であり、求められているということ、第 3 に、中高生が不安に感じていることを解消する必要があるということ、第 4 に、参加するためには開催日時やその場に友達がいることも重要であるということ、第 5 に、参加者としてではなくボランティアとして参加することにより、子ども食堂という場に参加することへの抵抗感、恥ずかしさを緩和することができるということがわかった。こうした点を中高生が子ども食堂への参加を促すためのヒントや施策として挙げた。

本稿では、中高生を子ども食堂への参加を促すためにはどういう方策が必要であるか、その条件を探ることを目的としている。だが、第 1 に、中高生に合わせ子ども食堂の開催日時を変更することは簡単ではないということ、第 2 に、学習支援を新しく実施する子ども食堂は中高生が参加者として定着することを目指して様々な努力を注ぐが、学習支援を始めたばかりの子ども食堂にとっては負担になっていること、第 3 に、どの年齢層の子どもも通えるようにすることは難しいということ、まだ学習支援を意識して行っている子ども食堂は少なく、これから学習支援を根付かせていくには時間がかかりそうだということが、今後の課題であると感じた。

序章　はじめに

近年子ども食堂が急速に増え、それに伴い、子どもの貧困対策だけではなく、地域交流の場ということを大きく掲げている子ども食堂が多く存在し始めた。地域住民が年齢の垣根を超えて関わりあうことが出来る、食事を一緒に取ることが出来る場が増えていくことは、子どもや高齢者の孤食が問題視される今、必要とされることであり、地域住民がお互いに存

在を認識し日常の中でも関わり合うことが出来る一つのきっかけとして役立つ。

しかし、実際子ども食堂に参加する中で、子どもは親と参加し、高齢者は高齢者で固まっている、またはボランティアの人に付き添ってもらいながら参加している、というように、地域の交流の場として機能している、というよりは、子ども食堂の中でも各々が“個”で活動しているように見えた。この現象の原因を考えた時、子ども食堂は小さい子どもと高齢者の参加者が極端に多く中高生の参加者が極端に少ない、参加者の年齢が二つに大きく分かれてしまっている、ということに気付いた。年齢の二極化である。

参加者年齢の二極化が起こっている子ども食堂は、地域の居場所であると言えるのか。多世代交流を行い、地域に開かれたコミュニティの場として子ども食堂を活用するためには、世代間のギャップを無くす(中高生の参加を促す)必要があると考える。

東日本大震災の際、居住者全員参加の組織である管理組合があるマンションでは、緊急時とその復興に判断、責任を持ち、合理的に対応する例が多かった。また、いざという時に機能した管理組合は、日常的に全員参加のイベントを多く行っていた。さらに、相互扶助の助ける側にまわった人は、日常的にイベント等のコミュニティの場へ多く参加した人であることも分かっている。日ごろからコミュニティの場、特に全員参加型のイベントを実施することにより、災害時の人命救助やその後の生活支援の実施が多く行われる。(齊藤広子, 2016：111－113)ゆえに、いざという時のためにも、地域住民や近隣の人々と知り合う、関わりあうきっかけが必要となり、子ども食堂もその場の一つとして機能することが出来る。いざという時、高齢者を助けることが出来るのは、未就学児などの小さい子どもではなく、力のある中高生や大学生、大人である。そのためにも、地域の人々が集まる、交流する場には小さい子ども、高齢者だけでなく、できるだけ多くの世代の人々が参加する必要がある。

また、1962 年と 2007 年に小学校 6 年生、中学校 3 年生を対象に行なった全国学力調査の都道府県別平均点と社会経済指標との相関関係の結果で、貧しい世帯比率の高い県ほどテストの得点が低くなるという傾向が 45 年を隔てて残っている（苅谷, 2009：233-235）ということが分かっており、コロナ禍である今、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの報告書では、中高生が困っていることとして日常生活が送れないことの次に学びに関することを挙げていたことから、これらの学習に関する問題を子ども食堂という場を使って少しでも解決することが出来たらと考えた。

ここではまず、愛知県内 59 か所の子ども食堂を対象に行ったアンケートから、子ども食堂の参加対象年齢、参加している子どもの年齢をグラフ化し、年齢別の参加頻度のクロス表を作成し、それらから読み取れる子ども食堂の現状をまとめる。次に、実際に中高生の参加者が多く学習支援を行う子ども食堂の紹介、子ども達に直接行ったアンケート、実際に参加してみた感想、コロナ禍での子ども食堂の現状、学習支援事業にアルバイトとして三年間参加している中での実体験、三年間様々な子ども食堂に参加する中での経験を反映させながら、そこから見えてきた中高生の子ども食堂への参加を促すためのヒント、施策、今後の課題を論じていく。

第１章　子ども食堂と年齢の現状

ここではまず、子ども食堂の参加対象年齢、参加している子どもの年齢別の人数、子どもの年齢別の参加頻度を知るため、愛知県内 59 か所の子ども食堂に行ったアンケートの

結果をまとめる。調査対象は愛知県内の子ども食堂の運営者、参加している子どもであり、運営者は 59 件、子どもは 368 件から回答を得ることができた。ここでは、以下の 5 つの項目を利用し単純集計、クロス集計と展開していく。

（運営者）
・子ども食堂の参加対象年齢
（子ども）
・参加している子どもの年齢
・子どもの参加頻度

第１節　子ども食堂の参加対象年齢と参加している子どもの年齢

2018、2019 年に実施した愛知県内の子ども食堂を対象に行ったアンケートを基に、子ども食堂の運営者が提示している参加対象年齢と、実際に参加している子どもの年齢別の人数をグラフでまとめた。

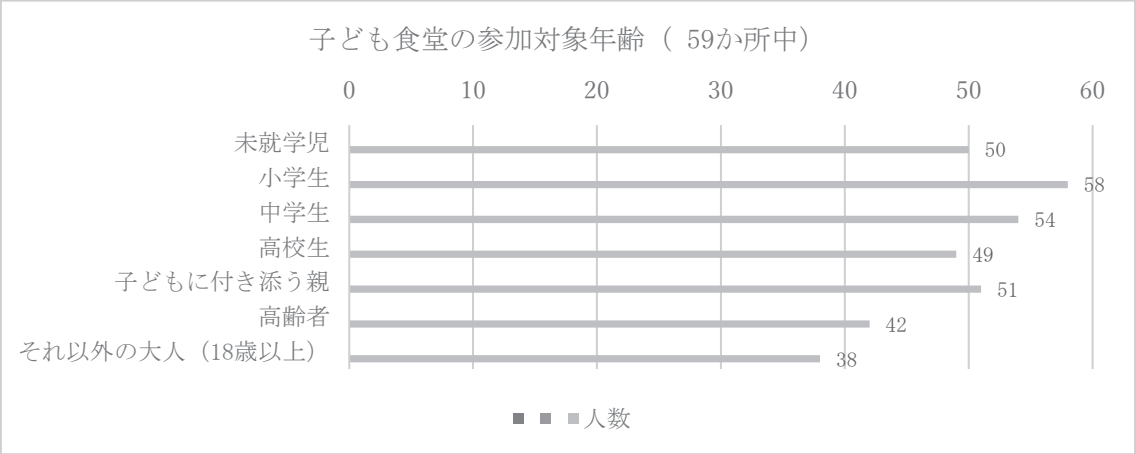


図 1

図 2

子ども食堂が提示している参加対象年齢は全 59 か所中中学生を対象としている所は 54 か所、高校生を対象としている所は 49 か所。それに対し、子ども食堂に参加した子どもの年齢は中学生高校生と年齢が上がるにつれ著しく低下する。（中学生は全体の 8%、高校生は全体の 2%）では、少ない中高生の参加者の参加頻度はどうなのか。クロス集計表を使い年齢カテゴリー別の子どもの参加頻度を求めていく。

第２節　年齢カテゴリー別の子どもの参加頻度

表１

年齢カテゴリー と 子どもの参加頻度のクロス表(回答がされていたもののみ)

			Q2_1							合計
			1	2	3	4	5	6	7	
年齢カテゴリー	1	度数	32	14	5	0	0	16	1	68
		総和の %	8.80%	3.90%	1.40%	0.00%	0.00%	4.40%	0.30%	18.70%
	2	度数	163	33	9	4	5	32	9	255
		総和の %	44.90%	9.10%	2.50%	1.10%	1.40%	8.80%	2.50%	70.20%
	3	度数	21	2	1	1	0	5	1	31
		総和の %	5.80%	0.60%	0.30%	0.30%	0.00%	1.40%	0.30%	8.50%
	4	度数	6	1	0	0	0	0	2	9
		総和の %	1.70%	0.30%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.60%	2.50%
合計		度数	222	50	15	5	5	53	13	363
		総和の %	61.20%	13.80%	4.10%	1.40%	1.40%	14.60%	3.60%	100.00%

（年齢カテゴリー：1.　１～６歳　2.　７～１２歳　3.　１３～１５歳　4.　１６、１７歳）
（子どもの参加頻度：1.　ほとんど毎回来ている　2.　２か月に１回　3.　３か月に１回　4.　半年に１回　5.　1 年に１回　6.　今回が初めて　7.　その他）

クロス集計をした結果としては、中高生の参加者は少ないが、ほとんど毎回来ていると答えた中高生は、小学生の 6 割を超え 7 割弱を占めていた。このことから、参加したが子ども食堂に来なくなったというわけではなく、中高生が初めて子ども食堂という場に来るということの壁の大きさが存在する、あるいは、小学生の時は通っていたが中高と年齢を重ねるにつれて参加しなくなったということが分かった。

では、数少ない中高生の参加者は、何をきっかけ、目的として、どこの子ども食堂に参加しているのか。

第２章　中高生が参加する子ども食堂

アンケートを行った子ども食堂の中で、子どもの参加者 368 人中中高生は 40 人と少ない、ではその 40 人が参加している子ども食堂はどこなのか。また、その子ども食堂はどのようなところなのか、そこに参加している子ども達はなぜそこに参加しているのか。そこから中高生の声を聞き、子ども食堂への参加を促すためのヒントを探っていく。

愛知県内 59 か所の子ども食堂に行ったアンケートを確認したところ、一番多く中学生が参加していた子ども食堂は尾張旭子ども食堂おむすびやであった。これを踏まえ、ここからはこの尾張旭子ども食堂おむすびやに焦点を当てていく。

第１節　子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up

子ども食堂おむすびやは、学習支援 Link up と併設されており、毎週土曜日に開催され、

地域の方が運営する子ども食堂である。元々、現在併設している学習支援 Link up が、学習支援に参加する学生ボランティアに向けてご飯を作っていたが、そのご飯を学習支援に参加する子ども達が見て食べたいと言い出し、スープを食べさせてあげるとおいしいと喜び、そこから子ども達が普段まともに食事を取ることが出来ていないことを知った学習支援 Link up の方が、ご飯を食べていない子どもが学習意欲が湧くのは難しいのではないか、学習支援という場で子ども食堂を併設することにより本当に必要としている子どもに届くのではないかという考えから、学習支援をしている尾張旭市に働きかけ、市民活動として新たに子ども食堂をやってみたい方、子どもの貧困といった社会課題を話して、だったらぜひ参加してみたいと言ってくださった地域の方に協力してもらい新しく市民団体を作り、子ども食堂おむすびやが開かれた。

実施者：子ども食堂おむすびやは地域の市民団体、学習支援 Link up は尾張旭市
実施場所：多世代交流館いきいき（愛知県尾張旭市稲葉町 1 丁目 41-1）
実施日：毎週土曜日
対象者：ひとり親世帯、生活保護受給世帯及び生活困窮世帯の中学生

子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図ることを目的としており、ひとり親世帯、生活保護受給世帯及び生活困窮世帯の中学生に対して、学習支援を行うことにより、学習の場所、機会を提供し、学習する習慣を身に付け、進学に向けた学力の向上、子どもの社会的自立を支援している。また、地域での子どもの居場所作り、そこに関わる大人が子どもと一緒に成長していくこと、子どもの生きていく力を養うことも目指している

第２節　アンケート調査の結果から

ここでは、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up に参加する子どもを対象に行ったアンケート内容、アンケートの結果、また、その結果から読み取れることを記していく。（アンケート内容　終章の下に記載）

次に、以上のアンケートの質問内容を大きく八つに分けて、それぞれの結果の数値をグラフ化した。

①学年
②部活をしているか
③学習支援 Link up に参加しているか、休む時の理由、参加する理由
④子ども食堂おむすびやに参加しているか、休む時の理由、参加する理由
⑤好きなイベント、他にあったらいいなと思うイベント
⑥子ども食堂という場所に持っていたイメージ、初めて参加した時の気持ち、どのような不安があったか
⑦おむすびや以外の子ども食堂が他にある場合行くか、行く理由、行かない理由
⑧コロナ禍である今困っていること

① 学年

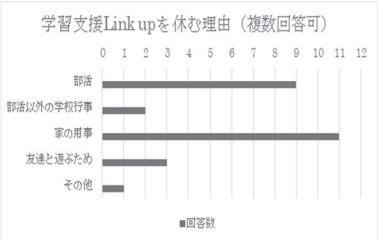
このアンケートは子ども食堂おむすびやに隣接する学習支援 Link Up に参加している子どもを対象に取ったアンケートであり、また、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up には中学生だけでなく高校生も参加しているが、今回のアンケートは中学生を対象に実施したため、グラフには Link up に参加する中学生の学年別の人数が示されている。参加者の人数は中学 1 年生が 4 人、中学 2 年生が 9 人、中学 3 年生が 7 人であった。

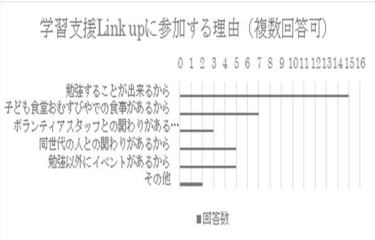
参加人数は毎回基本 20〜30 人程居り、中学生の割合が高い。中学生の時に参加していた子ども達が高校生になっても食堂や学習支援に参加してくれたり、学習支援では生徒側の立場としてだけでなく中学生に勉強を教える立場として参加することも出来る。

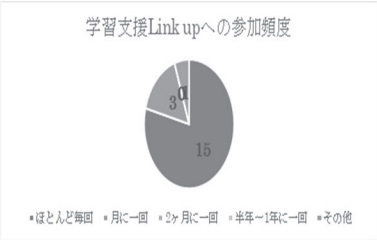
②部活をしているか

③④で学習支援 Link up、子ども食堂おむすびやを休む時の理由を聞いており、部活をしている中で何人の子どもが部活を理由に休んでいるのかを知るために部活をしているかという質問項目を作った。その結果、今回参加していた 20 人中半数を超える 12 人が部活をしていた。

③学習支援 Link up に参加しているか、休む時の理由、参加する理由





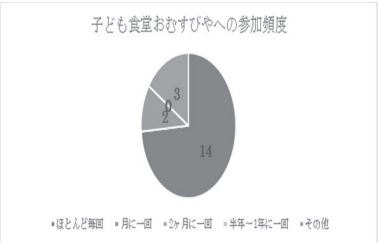


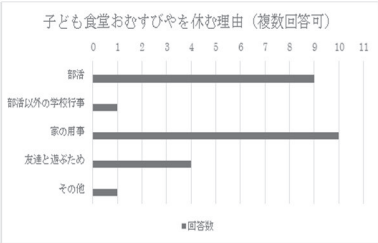
学習支援 Link up への参加頻度は、20 人中ほとんど毎回が中 15 人、月に一回が 3 人、その他で月に二回と回答したのが 1 人、未回答が 1 人であった。

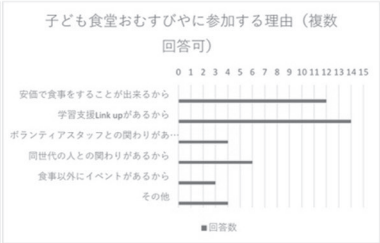
休む理由は複数回答で、回答数が多い順に、家の用事が 11 人、部活が 9 人、友達と遊ぶためが 3 人、部活以外の学校行事が 2 人、その他で勉強と回答している人が 1 人であった。家の用事と回答した人数が一番多いが、③で部活をしていると回答した 12 人中約 8 割の 9 人が部活を理由に休んでいることから部活も Link up を休む大きな原因と言える。

参加する理由は複数回答で、回答数が多い順に、勉強することが出来るからが 15 人、子ども食堂おむすびやでの食事があるからが 7 人、同世代の人との関わりがあるから、勉強以外にイベントがあるからがどちらも 5 人、ボランティアスタッフとの関わりがあるからが 3 人、その他で行けと言われるからと回答している人が 2 人であった。勉強することが出来るからという回答が圧倒的に高かった。

④子ども食堂おむすびやに参加しているか、休む時の理由、参加する理由





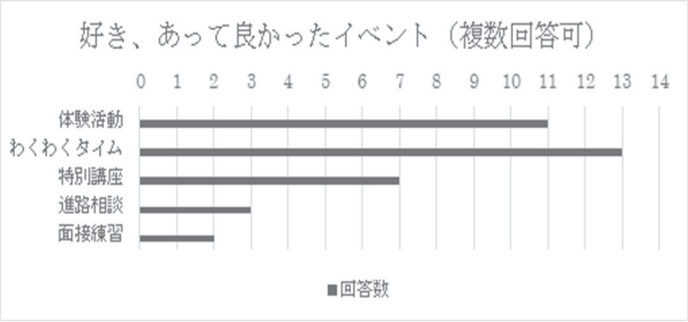


子ども食堂おむすびやへの参加頻度は、20 人中ほとんど毎回が 14 人、月に一回が 2 人、その他で月に二回と回答したのが 1 人、参加していないと回答したのが 2 人、未回答が 1 人であった。

休む理由は複数回答で、回答が多い順に、家の用事が 10 人、部活が 9 人、友達と遊ぶためが 4 人、部活以外の学校の用事が 1 人、その他で勉強と回答している人が 1 人であった。Link up と同様に家の用事と回答した人が一番多いが、③で部活をしていると回答した 12 人中約 8 割の 9 人が部活を理由に休んでいることから部活もおむすびやを休む大きな原因と言える。

参加する理由は複数回答で、回答数が多い順に、学習支援 Link up があるからが 14 人、安価で食事をすることが出来るからが 12 人、同世代の人と関わりがあるからが 6 人、ボランティアスタッフとの関わりがあるからが 4 人、食事以外にイベントがあるからが 3 人、その他で分からないが 2 人、とても美味しいからが 2 人であった。おむすびやに参加する理由として、学習支援 Link up があるからという理由が安価で食事が出来るからという理由を上回る結果となった。

⑤好きなイベント、他にあったらいいなと思うイベント



・体験活動

近隣の農家さんの畑で堆肥作り体験や野菜の収穫体験などをする農業体験や、バザーの待ち行列の整理、防災ワークショップの運営をする夏祭りのボランティア、おむすびやの方のご指導によるサンドイッチ作り、希望する生徒によるおむすびやでの食事作り体験など。

・わくわくタイム

テスト勉強や受験勉強に真剣に取り組む生徒達がリフレッシュ出来るよう、勉強の合間に休憩時間を挟み、身体を動かしたり、道具が無くても気軽に楽しめるゲームをしたりする。ゲームの内容は毎回学生サポーターが考え、後出しじゃんけんゲームや指体操ゲーム、絵しりとりなどオリジナルの参加型ゲームが行われる。また、留学や青年海外協力隊として海外に行っているスタッフとネットで繋がり、それぞれの国について紹介してもらうということもあった。

・特別講座

様々な学校のキャリア教育講師として講演をしているフリーアナウンサーの方などを招いてのコミュニケーション講座や、１、２年生を対象に行うテスト対策ミーティング、３年生を対象に行う受験に向けて話し合う受験対策ミーティング、海外から帰国したばかりのスタッフによる海外での体験紹介、様々な職業の方を招いての職業講話など。

・進路相談

それぞれの生徒の不安な気持ちや進路についての素直な気持ちを一人ずつ聞いて、相談内容を踏まえてそれぞれの希望や学力に寄り添うサポートをする。

・面接練習

受験生を対象に行う。

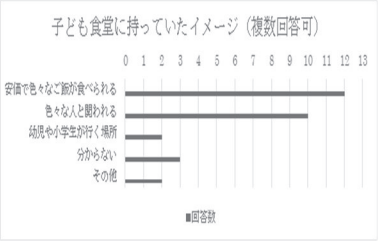
これら大きく五つに分けたイベントの中で人気のあるものは複数回答で回答が多い順に、毎回学習支援中に行われるわくわくタイムが複数回答で 13 人と一番多く、次に体験活動が 11 人、特別講座が 7 人、進路相談が 3 人、面接練習が 2 人であった。

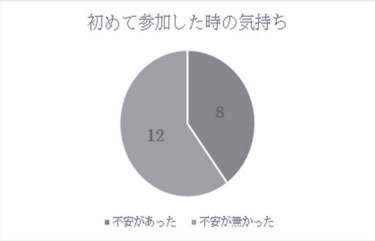
実際に、わくわくタイム、テスト対策ミーティング、受験対策ミーティングに参加し、わくわくタイムでは友達同士ではなく一人で参加する子ども達も楽しそうに参加している姿を見ることが出来、テスト対策ミーティング、受験対策ミーティングではただ子ども達が不

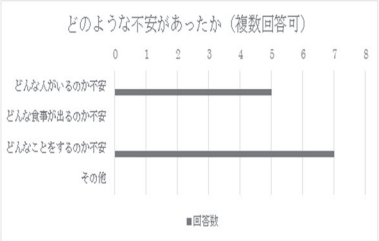
安に思うことを話すだけでなく、その不安に対して学生スタッフが実際に中高生の時どうしていたのか、解決方法を一緒に考えていた。

また、他にあったらいいなと思うイベントはあるかという質問では、ハロウィンパーティー、お餅つき、お正月にするおもちゃ遊びという回答があった。

⑥子ども食堂という場所に持っていたイメージ、初めて参加した時の気持ち、どのような不安があったか







まずは子ども食堂に持っていたイメージは複数回答で、回答が多い順に、安価で色々なご飯が食べられるが 12 人、色々な人と関われるが 10 人、分からないが 3 人、幼児や小学生が行く場所が 2 人、その他でなんとも思っていなかったが 1 人、美味しいご飯が食べられるが 1 人であった。

次に Link up、おむすびやに初めて参加した時の気持ち（不安があったか無かったか）では、20 人中不安があったと答えた人は 8 人、不安が無かったと答えた人は 12 人であり、半数以上の人が不安が無かったと回答した。また、不安があった場合どのような不安があったかは複数回答で、回答が多い順に、どんなことをするのか不安が 7 人、どんな人がいるのか不安が 5 人であった。不安があった場合でも食事に対する不安は無かったという結果になった。

⑦おむすびや以外の子ども食堂が他にある場合行くか、行く理由、行かない理由

おむすびや以外の子ども食堂がある場合行くか行かないかという質問では、20 人中行くと答えた人が 6 人、行かないと答えた人が 13 人、未回答が 1 人で、行かないと答えた人の率が高かった。

また、行くと答えた人の理由では、便利だから、美味しいご飯が食べられるから、安そうだから、色々なものを食べてみたいから、違う食べ物があるからという回答があり、行かないと答えた人の理由では、行くのがめんどくさいしおむすびやに慣れているから、Link up だとご飯も食べられて勉強も出来るから、美味しくなさそう、おむすびやが良いから、交流がめんどくさい、他の子ども食堂にあまり行ったことがないから、なるべく不安な場所に行

きたくないから、行く理由がないからという回答があった。

⑧コロナ禍である今困っていること

コロナ禍である今何か困っていることはあるかという問いに対し、勉強、成績、マスクを着けて生活すること、弟がまだご飯を食べられないという回答があったが、無いという回答がほとんどであった。

子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up の参加対象者はひとり親世帯、生活保護受給世帯及び生活困窮世帯の中学生であるが、①で述べているように中学生の時に通っていた子ども達が高校生になっても通っているなど、コロナが流行する前は学習支援に来ている子どもの家族、親戚、友達というように幅広く迎え入れていた。コロナ禍である現在は部屋に入ることが出来る人数が制限されているため対象の子ども達しか迎え入れることが出来なくなってしまった。

②、③、④の結果から、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up を休む理由は部活動をしている子どもにとって部活動の影響は大きいということが分かった。Link up は午前の部、午後の部に分かれているため部活動の実施時間によって参加する時間を変えることも可能であるが、部活動が一日ある場合、午前だけの場合でも疲れにより参加しないということもあるのではないかと考える。

また、③、④の結果を比べてみると、参加頻度はほとんど同じであるが、それぞれに参加する理由で、学習支援 Link up では勉強することが出来るからという回答が圧倒的に多く、次に子ども食堂おむすびやでの食事があるからという回答があったのに対し、子ども食堂おむすびやでは安価で食事をすることが出来るからという回答よりも、学習支援 Link up があるからという回答が 2pt 多かった。つまり、学習支援 Link up、子ども食堂おむすびやどちらの参加理由でも勉強することが出来るという理由が一番多かった。

③、④の参加する理由で、イベントがあるからという回答の回答数は、学習支援 Link up では三番目、子ども食堂おむすびやでは五番目と少なかったが、⑤の好き、あってよかったと思うイベントは何ですかという問いでは子ども達が積極的に回答していたということから、中学生にとってイベントは参加理由には直接的には繋がらないが、学習支援や子ども食堂にあると良い、楽しいと感じるものであることは分かった。また、⑤のそれぞれのイベントの回答数から、誰かの話を聞くという、どちらかというと受け身であるイベントよりも、自分が能動的に参加することが出来るイベントが人気であることが分かった。

また、⑥の子ども食堂に持っていたイメージは何ですかという問いでは、安価で色々なご飯が食べられる、色々な人と関われる、美味しいご飯が食べられるなどポジティブな意見が多く、初めて参加した時の気持ち（不安があったか無かったか）という問いでも不安は無かったという回答の方が多いという結果が得られた。不安があったと回答した人が感じていた不安要素としては、何をするのか不安、どんな人が居るのか不安という順に多く、参加を促すためにはこの二つの不安要素を参加する前に解消してあげる必要があることが分かった。

⑦のおむすびや以外の子ども食堂があった場合行くかという問いでは、行くと答えた人より行かないと答えた人の方が多いという結果が得られたが、それぞれの意見の理由とし

て挙げられた、美味しいご飯が食べられるから、色々なものを食べてみたいから、違う食べ物があるからという行くと答えた人の意見と、子ども食堂おむすびやだとご飯も食べられて勉強も出来るからという行かないと答えた人の意見から、子ども達の食事に対する期待と、食事以外に学習支援がある環境を求めていることが分かった。

⑧のコロナ禍である今何か困っていることはあるかという問いでは、無いという回答がほとんどであり、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの報告書で中高生の二割りが困っていると答えていた学習に関する不安も、回答数は 20 人中 2 人の一割であった。学習支援 Link up は、毎週開催され、進路相談や学生スタッフも多く学習に関してしっかりサポートされていることもあり、学習に対して不安を持つ子どもが少ないのではないかと考える。

次に、ボランティアとして子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up に参加する中で気付いたことを述べていく。

第３節　ボランティアとして参加した経験から

子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up に 7 月から計 6 回参加する中で、まず学習支援 Link up の子ども達に対するしっかりとしたサポート体勢に驚いた。子ども食堂に隣接する一般的な学習支援では基本的に、子どもが分からない、教えて欲しいということを教えたり、話し相手になったりするものというイメージを持っていたが、学習支援 Link up では、子どもに勉強を教える、話し相手になるだけでなく、勉強の合間のわくわくタイム、テスト対策ミーティング、受験対策ミーティング（第３章第２節アンケート結果⑤参照）、PDCA シートの記入（何を勉強するか、目標のページ数、達成度の記入、サポーターからのコメント）、サポーターが自分の勉強やレポート作成など自分たちの作業を行っての学習の雰囲気作り、イベントが行われ、また、サポーターは学習支援開始前にそれぞれの子どもの注意事項の確認、学習支援終了後にその日の子どもの様子で気付いたことを報告するミーティングを行い、学習支援中にも LINE を使ってそれぞれの子どもが何を学習しているのか、様子などを共有している。

学習支援を行うサポーターは教員サポーター、一般サポーターの方も居るが、基本的に学生サポーターが多く、学生サポーターを中心に場が進行されており、子ども達にとって年齢が近いサポーターが多いことは場への馴染みやすさ、話しやすさだけでなく、学生サポーターの姿をロールモデルにすることにも繋がり、学生サポーターにとっても子ども達と関わる中で気付くことが多く、実際に就職に対する考え方が変化する学生や、人との関わりが苦手で克服したいと参加していた学生も居り、教員を目指しているサポーターの中から毎年現役合格で教員も誕生しており、子ども達、学生サポーターがお互いに良い影響を受けているように感じた。

子どもは小学生から中学生へ教育段階が上がると教師に対して、一方で権威に反感を感じつつも他方では心情的な繋がりを求めようとするが、この繋がりは構造的な制約もあってなかなか得られず、多くの中学生は期待外れと感じ教師への反発を強める(苅谷ほか, 2000：34)ということからも、学校以外での大人との関わり、特に年齢が近く心を開きやすい大学生のサポーターは必要であり重要だと考える。

学習支援 Link up のサポーターは地域に住んでいる学生だけでなく近隣の大学に通っている学生や遠い地域から通っている学生もいることに対し、子ども食堂おむすびやのボラ

ンティアは全員が地域の方だった。地域の方がボランティアとして参加していることにより、子ども食堂おむすびやと地域の方の緩やかなネットワークが繋がり、地域の方が食器や鍋を提供してくださったり、農家さんが食材を持ってきてくださったりしていた。スタッフの方にお話を聞く中で、この地域の方の緩やかなネットワークが、子ども食堂、学習支援が毎週継続出来ていることにも繋がっているとうこと、また、地域の大人と参加している子ども達に目に見えない繋がりが生まれ、子どもが人と人との温もりを教えていただいているということにも繋がっているということを知った。やはり、子ども食堂、学習支援は地域の理解、協力無しで行うことは出来ない。

第４節　コロナ禍と子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up

コロナ禍により開催出来ていない子ども食堂も多い中、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up は、感染対策のためにスタッフ用のフェイスシールドが用意されており、手洗い、机の消毒の徹底、部屋に入る人数の制限など、感染予防に充分注意しながら再開されている。

コロナにより学習支援に来ている子どもの家族、親戚、友達は迎え入れることが出来なくなってしまったが、参加する子どもの人数に変化は無く、学生ボランティアの人数はむしろ増えており、スタッフの方は、コロナ禍により大学生が大学以外のことに関心を持つ時間が増え、学生の目が地域や社会課題といったところに向けられ、ボランティアというものに関心を持ったのではないかとおっしゃっていた。実際に参加する中で、多い時には学生ボランティアが 20 人近く参加しておりとても活気があった。

また、コロナにより学習支援を 1 ヶ月閉じることになった時に、学生ボランティアから「場所が無くても出来ることはある」「オンラインや通信でも出来る」という意見が出て、学習支援や子ども食堂に行きたいが気が引ける、来ていたがなんとなく来なくなってしまった、登録はしているが来ていないという、今学習支援に来ることが出来ていない子どもに対し、これまでは、仕方がないと思っていたが、個別に通信制という手でも関わることが出来るということに気付き、実際にこれからやろうと考えおり、それをきっかけに子ども達が来てくれたらとスタッフの方がおっしゃっていた。

このように、コロナ禍により時間があるからこその考えの変化、気付きによりプラスなこともあるということを参加しお話を聞く中で知ることが出来た。

では、学習支援事業に三年間関関わり、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up 以外の学習支援が行われている子ども食堂に参加する中で気付いたことはどのようなことなのか。第３章で論じていく。

第３章　学習支援と子ども食堂

第１節　学習支援に参加している経験から

ここでは、三年前から週に一度アルバイトとして学習支援事業に携わり、参加する子ども達と接する中で気付いたことを記していく。

参加している学習支援事業は学習支援 Link up と同じ、ひとり親世帯、生活保護受給世帯及び生活困窮世帯の中学生を対象としており、対象者が高校生になっても参加できる。一回につき 18 時 45 分から 20 時 45 分までの二時間、基本的には子どもがやりたいと持ってきた勉強をサポーターが教えるという形で行われる。

勉強のみに縛られるのではなく、学習の合間に子どもとサポーターが好きなアーティストやゲーム、学校や家のことを話したり、年に数回イベントが行われたり、他校の子ども同士が仲良く遊んだり、二時間という時間の使い方は自由であり様々である。

しかし、学習支援に参加する子どもの中にも学習塾や習い事をしている生徒も多く（学習塾や習い事に通えるという経済状況なので貧困家庭の子どもに食事や学習支援をするという子ども食堂からの提供を本当に必要としているかは分からないが）、また、土日にも部活動の練習や大会があり忙しくしている子どもも多い。そのため参加出来ない、疲れていてこれないという子供も居る。また、通い始めのまだ会場の雰囲気に慣れていない頃は、来週友達が来ないなら自分も参加しない、という子どもも居り、その場に友達が居るのか居ないのかということも中高生という多感な時期の子どもにはとても重要であり行動が左右されることであるというように感じた。

その中でも、三年間参加する中で一番感じたことは、参加者の定着が難しいということである。新しく参加すると決まった子どものうち、半数の生徒は1、2回で来なくなってしまったり、月に一度、半年に一度といった不定期での参加になってしまう。参加しなくなってしまった明確な理由は分からないが、学習スタイルが合わなかった、雰囲気が合わなかった、なんとなく面倒になってしまったと理由は様々であると考える。実際に、勉強に集中したい子どもと遊びたい子どもが同じ空間に混在し、対応に困ったことがある。しかし、毎週しっかりと参加する子どもや一度違う会場に移ったが戻ってきた子ども、高校生になっても時々参加してくれる子ども、久しぶりに参加して落ち着くと言ってくれた子どもも居るため、この学習支援事業の形が悪いというわけではなく、来なくなってしまった子どもをそのままにせず子ども一人一人それぞれに合った学習支援の形を探すことが大切であると感じた。

では次に、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up 以外の学習支援を行う子ども食堂に参加した経験を記していく。

第２節　様々な子ども食堂に参加している経験から

三年間で計八か所の子ども食堂に参加し、その中で学習支援を行う子ども食堂は二か所であった。

学習支援を行う子ども食堂にはやはり中高生の参加者が多く、反対に学習支援を行っていない子ども食堂は参加している子どもの年齢層の低さ、高齢者の方の多さ、また、家族で参加している率が高いという印象が強かった。

学習支援を行なっていない子ども食堂は、中高生の参加者が少ない分、新しく中高生が参加するのには少し抵抗を感じてしまう空気が存在しているように個人的には感じた。また、子ども食堂で行われるレクリエーションは小さい子ども向けのものが多く、そこに居る子ども達はとても楽しそうだが、中高生が参加するには少し恥ずかしさを感じてしまう内容かもしれないとも感じた。

学習支援 Link up（子ども食堂おむすびやに隣接）以外の学習支援を行なっている子ども食堂では WAIWAI のわミーに参加したことがあり、WAIWAI のわミーでは週に一度無料で学習支援と食堂が行われている。ここでは大学生だけでなく、大人が積極的に子どもたちの勉強を見ており、地域の交流の場として世代交流を学習支援を通して行う良い例である

と考える。

また、学習支援は行なっていないが、中高生の子ども食堂への参加を促すためのヒントをびほく子ども食堂で得ることが出来た。びほく子ども食堂は月に一度開催され、参加者もスタッフと一緒にご飯を作り食の大切さを学ぶという形の子ども食堂で、親子で参加している人が多かったが、子ども食堂近隣にある高校に通う生徒がボランティアとして参加し、子ども達が料理をするのを手伝ったり食事が終わった後に子ども達と遊んだりと活き活きと活動しており、ボランティア活動参加報告書というものを記入して学校に提出していると言っていた。参加者としてではなくボランティアとして参加することで、子ども食堂へ参加することへの抵抗感、恥ずかしさを無くすことが出来るかもしれないと気付いた。

終章　調査、経験から見えたものと今後の課題

ここでは、ここまで論じてきた中から中高生の子ども食堂への参加を促すために見えてきたヒント、施策をまとめ、課題を論じていく。

まず、第１章で行った年齢カテゴリーと子どもの参加頻度のクロス集計の結果から、中高生の子ども食堂への参加率の低さは、中高生が参加している中で離れていくのではなく、子ども食堂という場へ初めて足を運ぶということの壁の大きさによるもの、あるいは小学生から中学生高校生へと学校段階が上がっていくことによって起こるものであることが分かった。これらは、地域の人々が集まる場所へ参加することに対しての恥ずかしさなどの心理的理由や時間の都合による物理的理由によるものであると考える。では、中高生の子ども食堂への参加を促すにはどうするべきなのか。第２章、第３章で論じたものを参考にして考えていく。

まず、第２章の子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up に参加する中学生を対象に行なったアンケートの結果から得た施策を四つ述べていく。一つ目は、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up どちらの参加理由も勉強が出来るということが一番回答数が多かったという結果、また、子ども食堂おむすびや以外に子ども食堂があっても行かないと回答した理由として、 子ども食堂おむすびやだとご飯も食べられて勉強も出来るからという意見があったことから、勉強したい、学びたいと考えている子どもが多く、学習支援を行なっていることは中高生が子ども食堂に参加するための大きなきっかけ、理由となることが分かった。学習支援は子ども食堂へ中高生の参加を促すだけでなく、中高生の学力向上にも大きな影響を与えると考える。二つ目は、子ども食堂おむすびや以外に子ども食堂があったら行くと回答した理由の中で、美味しいご飯が食べられるから、色々なものを食べてみたいから、違う食べ物があるからという意見があり、子どもが子ども食堂に対して食事に関する期待を強く持っていると分かったことから、食事もやはり子ども食堂には欠かせない、中高生の子ども食堂参加を促すのに効果的であることが分かった。三つ目は、子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up の参加理由で、勉強以外にイベントがあるからという回答は子ども食堂おむすびやでは五番目、学習支援 Link up では三番目と回答数は少なかったが、あってよかったイベントは何かという問いでは積極的に回答されていたこと、人気のあるイベントの内容から、イベントは中高生にとって子ども食堂に参加する大きなきっかけ、理由とはならないが、子ども達が能動的に参加できるイベントは中高生に人気であり、求められているという

ことが分かった。四つ目は、子ども食堂に持っていたイメージで幼児や小学生が行く場所という回答が少人数ではあるがあったこと、また、初めて参加した時の気持ち（不安があったか無かったか）という問いで、不安があったと回答した人が感じていた不安要素として、何をするのか不安、どんな人が居るのか不安という回答が多かったことから、これらの不安要素を子ども食堂の公式サイトやチラシなどで写真を載せたり説明することによって解消してあげることも効果的であると分かった。

第３章の、学習支援に参加している経験からは、子ども達にとって、学習支援が行われる曜日、時間帯、また、通い始めの頃はその場に友達が居るのかということがとても重要であるということが分かり、これは子ども食堂へ中高生が参加する際にも重要であることだと考える。また、参加する子どもが求めていること、合う学習支援のスタイルはそれぞれ異なるということも分かり、学習支援 Link up がこれから始めようと考えている個別に行う通信制の学習支援などそれぞれに合った学習支援を子ども食堂が行うことも、中高生を子ども食堂参加へ導くことに少なからず繋がると考える。

様々な子ども食堂に参加している経験からも、学習支援を行う子ども食堂は中高生の参加者が多いということから、やはり中高生の子ども食堂への参加を促すためには学習支援が効果的であると考える。学習支援を行うことにより、中学生が参加しやすい雰囲気、きっかけを作れるということだけでなく、勉強を教えるという行為により、大人と子どもに関わりが生まれ、子ども食堂が地域の交流の場としての働きを持つことが出来る。また、中高生が参加者として参加するのではなく、ボランティアとして参加することにより、子ども食堂という場へ参加することへの抵抗感、恥ずかしさを無くすことが出来、効果的であるということも分かった。びほく子ども食堂の、学習支援は無いが子ども達が料理をするのを手伝ったり食事が終わった後に子ども達と遊んだりと、ボランティアとして参加する形のもの、学習支援 Link up の、高校生が中学生に勉強を教えるボランティアとして参加する形のもの、また、埼玉県には、大人が運営するのではなく、学生（高校生、大学生）が主体となって運営している「ひこうき雲」という子ども食堂が存在する。ボランティアという形ではあるが、時によって分からない問題を一緒に参加する大学生、大人に聞いたり、進路などの悩みを相談したりということも出来ると良いと考える。実際に、学習支援 Link up では高校生がボランティアという立場で参加しつつ分からない問題を大学生の学生サポーターに聞いたりしている。

ここまで、子ども食堂を地域の交流の場、多世代交流の場として活用するためには今現在子ども食堂で起こっている年齢の二極化を緩和させる、無くしていく必要があり、また、中高生という学習内容が難しくコロナ禍で学びに対して不安を持つ年代の子ども（特に貧困層）を子ども食堂という場を利用し救う必要があるとし、そのために少ない中高生の参加者を増やす、参加を促す必要があると考え、そのための施策を考えてきたが、その中でいくつか課題も見つかった。

まず一つ目の課題は、中高生は部活動の練習や大会などにより、平日の夜や休日の昼間に開催される子ども食堂参加が難しいということである。子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up に参加する中学生を対象に行なったアンケート結果、また、学習支援に参加している経験からも、中高生が子ども食堂に参加出来ない、参加しない理由の大きな理由の一つであるということが分かった。この問題に対し、子ども食堂の開催日時変更を対策と

して挙げようと考えたが、子ども食堂の開催日時を変更することによって、これまで参加出来ていた人が参加出来なくなってしまうという事態を引き起こしてしまうかもしれない。地域の人々が集まり多世代交流を行うための対策が、参加出来ない人を創り出してしまっては元も子もない。

二つ目は、学習支援 Link up は参加頻度で毎回参加しているという回答の率が高く、第１章の年齢カテゴリー別の子どもの参加頻度でも中高生は参加頻度で毎回参加しているという回答の率が７割弱と高かったが、中高生の子ども食堂への参加を促すための施策として有力な学習支援に参加する経験の中ではなかなか定着率を上げることが難しかったため、学習支援を新しく行う子ども食堂は学習支援を行う中での定着率を上げるための努力が必要であるということである。中高生の参加者定着を目指すためには子ども食堂おむすびや、学習支援 Link up のように様々な努力が必要であり、学習支援を始めたばかりでまだ慣れていない子ども食堂にとっては負担になる。

三つ目は、中高生の参加を増やしたいと考えている子ども食堂は、学習支援を中高生の子ども食堂への参加を促すために行い、力を入れるだけでなく、これまで通っていた未就学児や小学生の参加も継続出来るようにし、どちらも両立しなければならないが、学習支援を行う子ども食堂は子どもの年齢層が高く、学習支援を行っていない子ども食堂は子どもの年齢層が低いと分かれてしまっていることから分かるように、その両立が難しいということである。子ども食堂それぞれに目的があり、今の形で良いと考える子ども食堂も多いと思うが、地域の交流の場、居場所を目指している子ども食堂は全ての人が参加出来、関わることが出来る空間を作る必要がある。

四つ目は、施策として学習支援を挙げたが、学習支援を活動目的としてとても意識していると回答した子ども食堂は、農林水産省が 2018 年に公表したアンケートの結果では 28.8％、私たちが 2018、2019 年に行ったアンケートの結果では 18.6％だった。数値を見るとやはりまだ学習支援をしっかりと意識して行っている子ども食堂は少なく、これから学習支援を広めて根付かせていくには時間がかかりそうということである。

このようにまだまだ課題は多いが、本稿で見つけた中高生の子ども食堂を促すためのヒント、施策、課題を意識しつつ、子ども食堂が負担を感じることなく、今現在子ども食堂に多く参加している世代の人も通い続けながら新たな世代の参加が促せられれば、とても良い交流の場、子ども食堂になり、困っている子ども達を救うきっかけになるのではないかと考える。

【調査票】

1.まずあなたのことについて教えてください。

・学年　中学校（　　）年生　　高校（　　）年生

・現在、部活をしていますか。

1. はい　　2. いいえ

・あなたは子ども食堂という場所にどんなイメージを持っていましたか。（複数回答可）

1. 安価で色々なご飯が食べられる
2. 色々な人と関われる
3. 幼児や小学生が行く場所
4. 分からない
5. その他　（　　）

2.次に、学習支援 Link up、子ども食堂おむすびやについて質問をします。

・あなたはどのくらいの頻度で学習支援 Link up に参加していますか。

1. ほとんど毎回参加している
2. 月に一回は参加している
3. ２ヶ月に一回は参加している
4. 半年～１年に一回は参加している
5. その他　（　　）

・あなたが学習支援 Link up を休む時の理由を教えてください。(複数回答可)

1. 部活
2. 部活以外の学校の用事
3. 家の用事
4. 友達と遊ぶため
5. その他　（　　）

・あなたが学習支援 Link up に参加する理由を教えてください。（複数回答可）

1. 勉強することが出来るから
2. 子ども食堂おむすびやでの食事があるから

3. ボランティアスタッフとの関わりがあるから
4. 同世代の人との関わりがあるから
5. 勉強以外にイベントがあるから
6. その他（　　）

・あなたはどのくらいの頻度で子ども食堂おむすびやに参加していますか。

1. ほとんど毎回参加している
2. 月に一回は参加している
3. ２ヶ月に一回は参加している
4. 半年～１年に一回は参加している
5. その他　（　　）

・あなたが子ども食堂おむすびやを休む時の理由を教えてください。(複数回答可)

1. 部活
2. 部活以外の学校の用事
3. 家の用事
4. 友達と遊ぶため
5. その他　（　　）

・あなたが子ども食堂おむすびやに参加する理由を教えてください。（複数回答可）

1. 安価で食事をすることが出来るから
2. 学習支援 Link up があるから
3. ボランティアスタッフとの関わりがあるから
4. 同世代の人との関わりがあるから
5. 食事以外にイベントがあるから
6. その他（　　）

・あなたが学習支援 Link up、子ども食堂おむすびやに初めて参加したときの気持ちを教えてください。

1. 不安があった　　2. 不安が無かった

・１の不安があったと回答した人に質問です。どのような不安がありましたか。（複数回答可）

1. どんな人がいるか不安
2. どんな食事が出るのか不安

3. どんなことをするのか不安
4. その他（　　）

・これまでのイベントで好きなイベント、あって良かったと思うイベントがあれば教えてください。

1. 体験活動（農業体験、夏祭りのボランティアなど）
2. わくわくタイム（絵しりとり、バースデーチェーンなど）
3. 特別講座（プチ講座、JTM、TTM、ディベート、コミュニケーション講座など）
4. 進路相談（個人面談など）
5. 面接練習

・他にあったらいいなと思うイベントがあれば教えてください。（例：クリスマス会、お餅つきなど）

（　　）

・コロナ禍である今、何か困っていることがあれば教えてください。（勉強のこと、家でのこと、友達とのことなど、どんなことでも）

（　　）

３.おむすびや以外の子ども食堂について質問します

・おむすびや以外の子ども食堂が他にある場合行きますか。

1. 行く　　2. 行かない

・1 の行くと答えた人は行く理由、2 の行かないと答えた人は行かない理由を教えてください。

理由（　　）

【参考文献】

・公益財団法人　日本都市センター，2016,「人口減少における多世代交流・共生のまちづくり」齊藤広子編『多世代共生型社会にむけて　人口・世帯減少時代のまちづくりー新たな仕組みを作る必要性ー』110-131
・苅谷剛彦,2009,『教育と平等 大衆教育社会はいかに生成したか』中央公論新社.
・公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン,2020,「子どもの声・気持ちをきかせて

ください！2020 年春・緊急子どもアンケート結果（全体版報告書）」（2020 年 11 月 8 日にアクセス）
・尾張旭子ども食堂「おむすびや」（2019 年 1 月 25 日にアクセス）
・苅谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗共，2000,『教育の社会学〈常識〉の問い方,見直し方』有斐閣.
・令和元年度第 1 回名古屋市子どもの未来を応援するプロジェクトチーム会議（2020 年 12 月 5 日にアクセス）
・福祉新聞，2019,「学生らが運営する子ども食堂　多世代が楽しく交流(埼玉)」（2019 年 1 月 26 日にアクセス)
・農林水産省，2018,「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～」（2019 年 1 月 21 日にアクセス)

【謝辞】

本稿の調査及び執筆に際し、ご協力いただきました子ども食堂の方々に厚く御礼申し上げます。また、ボランティアとして暖かく迎えてくださり、アンケート調査にご協力いただきました子ども食堂「おむすび」や学習支援 Link up の運営者、ボランティアスタッフ、中高生の皆さんには感謝に堪えません。そして、筆者の考えがまとまらず悩んでいる時、相談に乗っていただいた担当教員にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。